
I S インフィニット・ストラトス Wが羽ばたく時

アクア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス Wが羽ばたく時

【Nコード】

N6311X

【作者名】

アクア

【あらすじ】

ガンダムWとISの混ざった作品です。

一夏がヒロだったり

ある人物が登場したりなど

改造系です

温かくみてください。

ブローグ（前書き）

一夏と千冬さんがこわれています
それはダメだという方はブラウザバックにてお戻りください。

大丈夫な方はどうぞ

プロローグ

IS 正式名インフィニット・ストラトス

数年前、篠ノ之 束が作りだした マルフォーム・スーツ
しかし、世界はそれを認めなかった。

だが事件は起きた。

白騎士事件

篠ノ之 束が作りだしたIS最初の機体白騎士

世界各国からのミサイル 計2034発をすべて撃ち落とし、夕日
が落ちると同時に消えた。

この事件によりISは世界に認められた。

だが開発者と世界各国の首脳達の目論みは違った。

開発者 篠ノ之 束は宇宙に進出するためのパワード・スーツと考
えていた。

しかし、世界各国の首脳達はISを兵器として見ていた。

世界各国にISCOA 計467個が散らばった。

それによりISは戦争の抑止力となり、空軍の戦闘機などの現代兵
器が次々に処分されていった。

だが、ISには決定的な致命傷があった。それは女性にしかつかえ
なかった。

このことにより 女性の地位が上がった。逆に男性の地位が下がっ
ていった。

数年後

第1回 モンド・グロッソが行われた。

優勝者はのちにブリュンヒルデと言われる織斑 千冬であった。

この時からかもしれない。

ISにかかわった姉 織斑 千冬

幼馴染の関係である篠ノ之 篁

その姉であり、IS開発者の篠ノ之 束
この三人とかかわったために織斑 一夏の人生が狂い始めたのだろ
う。

そして、織斑 千冬がブリュン・ヒルデの名を手にしてから数年後、
第2回 モンド・グロツソが開幕した。

この時に、事件は起きた。

織斑 一夏の誘拐事件

モンド・グロツソ決勝戦 控室にいた織斑 千冬にドイツ軍から情
報が入った。

織斑 千冬の弟 織斑 一夏が誘拐された。と

織斑 千冬はいてもたってもいられずに、控室を抜け、自身唯一の
肉親である弟を助けにむかった。

だが、監禁されていた場所には、織斑 一夏はいなかった。

そう 織斑 千冬が着いた時には、事件は、解決されていた。

では、なぜ、織斑 一夏がいないのだろうか？

その真相はある人物に助けられたからである。

その人物の名は、ドクターJ

ドクターJは、自身の作った兵器MS 通称モビルスーツの戦闘試
験のために織斑 一夏がいた場所を標的にした。

その場にはISが数機いたが、MS相手に歯が立たず撤退していっ
た。

ドクターJは監禁されていた織斑 一夏にこう言った。

「力は欲しくないかの？」

その言葉に反応した一夏は言った

「なんでもする．．．だから、その力を俺によこせ！！」

その言葉を聞いたドクターJは不気味に笑った。

「欲しいのなら、ついてこい。」

MSが動き始めたと同時に、一夏も動きはじめた。

これが織斑 千冬が来る前に起こっていた事柄である。

それから時は過ぎ、一夏は自身の名前を変え ヒイロ・ユイと名乗るようになった。

ヒイロ・ユイこと織斑 一夏はドクターJが言うミッションを忠実にこなしていった。自身の感情を殺して・・・

ミッションの内容は、基地の破壊 極秘情報の入手など・・・
その中にはISの破壊工作もあった。

ヒイロにとってISの破壊工作は何度も成功させていた。
だが、今回は違った。

ドイツにあるIS最強部隊 シュヴァルツェ・ハーゼの試験段階のIS シュヴァルツェア・レーゲンの破壊もしくは機能不全にするミッションだった。

ヒイロにとって簡単なミッションであつた。
だが今回だけは違った。

ヒイロはいつもどおりに破壊工作をしていた。
そのとき、後ろから声が聞こえた。

「貴様、ここで何をしている？」

ヒイロは相手に聞こえないぐらいで舌打ちした。

「もう一度聞く。貴様はここで何をしている？」

ヒイロは、その場から逃げだす準備をした。

だが、その前に相手は動いた。

「っー！」

ヒイロはその場から飛び相手の攻撃をよけた。

だが、相手はそれを見逃さずに攻撃に手をくわえた。

「貴様をここで拘束させてもらう！」

ヒイロはこの時、あることに気付いた。

聞き覚えのある声だと。

「貴様！私をなめているのか！？」

やはり この声は・・・

「千冬姉・・・」

「何？」

ポツリと発した言葉に相手は反応した。

「貴様、顔をこちらに見せろ」

仕方なく、相手に自分の顔をみせた。

「っ！！」

相手に顔を見せた時、相手は、いや 織斑 千冬は顔の人相を変えた。

「いままで、どこにいたんだ。一夏。」

千冬はよわよわしく言った。

だが、俺は

「うるさい」

「何？」

「うるさいと言ったんだ。聞こえなかったか」

「うるさいとはなんだ！！私はあの日、お前がいなくなってから一生懸命探したんだぞ！！」

千冬はそう言ったが、俺は

「だったらどうして俺を助けてくれなかったんだよ！！あの日だってそうだ！姉さんがモンド・グロツソで優勝してからまわりの目線がかわった！俺が姉さんの弟だとわかると勝手に期待して、勝手に失望していった！それなのに姉さんは家に帰らず、ISにずっとかわって俺のことを忘れてたんだろ！？」

「なっ そんなことh「ふざけんなよ！！」！！」

「じゃあ、なんだ！姉さんは俺を一片たりとも忘れなかったのかよ！」

「ああ、そうだ。」

「じゃあ、なんで家に帰ってきてくれなかったんだよ！！」

「それは、ISのほうが忙しくて・・・」

「やつぱり、そうじゃないか！！自分の弟よりISをとつたんだろ！あんたの親友、篠ノ之 束の方を！！」

「・・・すまない、一夏、また昔みたいに二人で一緒に・・・」

「無理だね」

「なっ！」

「もう、無理なんだよ。姉さん。」

「なぜなんだ、一夏！」

「俺は、あの日から闇に生きてきた。まだ闇を知らない姉さんとはもう一緒に生きれないんだよ。」

「なっ、どこに行く。一夏！」

「俺を救ってくれた人のところだよ、姉さん。もう会えないと思うよ」

「行かないでくれ！一夏！」

「さようなら、姉さん」

今回のミッションは失敗した。

ドクターJには姉さんとあったと伝えたら

「悔いは残っておるか？」と言われた。

だが、俺は「いいえ、残っていません。」そう答えた。

「少し、休め ヒイロよ。」

ドクターJにそう言われ俺は、ベットに横になった。

俺は懐かしい夢を見た。
姉さんと一緒に遊んでいた頃の夢を

プロローグ（後書き）

どうでしたか？

感想お待ちしております。

設定（前書き）

設定です。
どうぞ！

設定

この小説内での設定

織斑 一夏

中学2年の頃に誘拐され、ドクターJについていく。

その二か月後、ドイツの基地にて 織斑 千冬と会う。

専用MS ウイングガンダム

ドクターJより織斑 千冬と出会った数日後に渡された。

性能は従来のISを凌駕しており、使い方次第で、第三世代機を簡単に倒せる性能

武装

ビームサーベル

その名の通りビームサーベル

威力は第三世代機の装甲をいとも簡単に溶解させてしまう。

出力を最大にすれば、ISの絶対防御が発動し、操縦者までも傷つけられる。

マシンキャノン

肩に小型のガトリングを装備

相手が接近してきたときに有効

バスターライフル

撃てる弾数はカートリッジを含め、20発

出力しだいでは、最小でシールドエネルギーを半分まで削れる。

最大の場合は、操縦者ごと塵とカス。

大抵アニメ版と同じです。

（作者の描写がおいつきませんでした。すみませんm（――）m

ドクター」

機械工学のスペシャリストだったが、ISが登場したため権威が落ちぶれた。

その前までは、いろいろな財団と契約していた。
（契約会社は作中に出てきます）

時代の流れ （一夏の年と共に書いていきます）

一夏１０歳 白騎士事件

一夏１２歳 第一回モンド・グロッソ開催

一夏１４歳 第二回モンド・グロッソ開催

決勝戦で誘拐され、ドクターＪに助けられた恩を返すためについていった

この作品の一夏はＩＳを毛嫌いしており、それにかかわっていた織斑 千冬とは絶縁状態

さらに、ＩＳを動かせるが、本人は嫌っているため使っていない。

設定（後書き）

設定どうでしたか？
感想待っています。

科学者、集合（前書き）

短いかとおもいますが、頑張りましたと自分は思います。

ではどうぞー！

科学者、集合

s i d e ヒイロ

俺の、いる所には、ドクターJ含め、五人の科学者がいた。

プロフツェサーG ステルス技術の権威

ドクトルS 火器管制システムの権威

H教授 コックピットシステムのエキスパート

老師O 機体駆動のエキスパート

この四人はドクターJの仲間らしい

「ヒイロよ、紹介するぞ。私の研究仲間だ」

「プロフツェサーGじゃ、よろしくたのむぞ」

「ドクトルSじゃ、よろしくな」

「H教授だ、よろしくな」

「老師Oだ、よろしくたのむ」

「ヒロ・ユイです。よろしくお願いします」

「では、さっそく話にはいるか」

「皆の者、あれは持ってきたか？」

「」「」「あぁ」「」「」

「ヒロよ、こっちにこい」

「はい」

俺は、ドクターの言うとうり五人の科学者で囲まれた真ん中に移動した。

「では、みなMSを出すのじゃ」

「」「」「あぁ」「」「」

「俺のMSの名は、デスサイズじゃ。ステルス機能を搭載している。このMSは隠密系の作戦向きの機体じゃ」

「では、次にこのMSはヘビーアームズ。殲滅戦用の機体じゃ。弾がなくなるとアーミーナイフしかなくなるので、気をつけろ」

「このMSは、サンドロック。白兵戦用の機体じゃ。砂漠など過酷な場所での戦闘が得意だ」

「この機体は、シェンロン。全地域での戦闘が可能になっている機体だ。欠点をいうと火力が少ないことだ」

「では、最後に僕のMSだ。名はウイング。この機体には可変機能が搭載されている。高速戦闘が可能じゃ」

「ありがとうございます。では俺は何をすればいい？」

「それは僕らがおって教える。では最初のミッションじゃ。中国にある亡国企業の基地を破壊してくるのじゃ。」

「ミッション了解。亡国企業の基地を破壊する。」

「場所はおってデータで送る。では行け！ヒロよ！この世界を壊すために」

今日、今から、俺はISに対して攻撃を仕掛けはじめた。

この先どのようなことが、起きようとも

俺は、俺自身の人生を狂わせたISとその開発者を . . .

殺す

科学者、集合（後書き）

どうでしたか？

感想待っています！

アンケート（前書き）

アンケートです。

どうぞ

あああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああ
 ウイングカッケえええええええええええええええ！！！！！！

アンケート（後書き）

アンケート待っています

中国でのミッション(前書き)

鈴が出ます。

ではどうぞー！

中国での、ミッション

s i d e ヒイロ

俺は、今、中国の上海にいる。ドクターからの指示で基地の場所が特定するまで待機になった。

やっぱ、すごいな、中国。

熱気があふれてる。

グウウウウウ

ちょうど、腹も減ってきたし、なんか食べるか。

s i d e o u t

s i d e ? ? ?

訓練が、やっと終わったわよ。

あの教官、どうにかならないのかしら？

ん？あれって・・・一夏!？

たしか誘拐事件の時から、姿をくらましてたつてきいたけど・・・
これは、何が何でも、とっ捕まえて今まで、どこにいたか聞き出し
てやる！！

待つてなさいよ！一夏！！

side out

side ヒイロ

！？ なんか急に寒気が・・・

まあ いった

「すみません！ 麻婆豆腐とラーメンください！（中国語）」

「あいよー！（中国語）」

さて、あとは待つだけだ。

「隣いいかしら？（日本語）」

「誰だ、お前？」

「私よ！一夏！鳳 鈴音よ！」

「そんな奴は知らないし、俺は一夏なんて名前じゃない」

「なんで、ここにいるのよ　一夏！　今までどこにいたのよ！？」

「だから俺は、一夏じゃない。俺の名前はヒロ、ヒロ・ユイだ」

「はあ？　あんたには、織斑　一夏っていう名前が、あるじゃない」

「俺は織斑　一夏じゃない！！」

パンツ！！

そついい俺は、机を思いつきりたいた。

「っ！！」

鈴は俺の動きに驚いたようだ。

「俺は一夏ではない。食事の邪魔だ。どけ」

そついうと鈴はどこかに消えた。

side out

side 鈴

何よ！一夏の奴！！私が心配してあげたっていうのに！

けど、なんで一夏は「俺は一夏ではない。」って言ったんだろ？

気になるわね。

side out

side ヒイロ

飯を食い終わつたと同時にドクターから基地の場所についての情報がきた。

．．．．．これは、難しいな。

基地は地下にあるし、その近くには、中国の基地もある。

どうやって、やろうか．．．．

今回はデスサイズを使うか．．．

思いたつたら、吉日 早速行きますか。

side out

亡国企業の基地内

side 責任者

私は今、かつてないほど驚いている。

いきなり、基地が爆発したと思ったら、兵士がどんどん真っ二つになっ
ていくではないか。

私も今、必死に非常口に走っている。

「はあああああ．．．」

何人かが前にいた。

「お前たち大丈夫か!？」

「はい、何とか．．」

「ほかの奴らは!？」

「きずいた時にはもう．．」

「一刻も早く逃げるぞ!」

「了か」
「ザン！」

「おい、どうした、おい！」

「よう、あんたが此処の責任者か？」

「誰だ！？」

「もう一度聞く。お前は此処の責任者か？」

「ああ！そうだ！いたい何のようだ！？」

「何、死んでもらうだけさ」

「なっ！！」

ここで私の意識はとんだ。

side out

side ヒイロ

ふう、最後の奴も殺したし、爆弾仕掛けて逃げますか。

「にしても、デスサイズのステルスすごいな、相手からは全然見えなかったしな」

それに、このシザース、威力が高いな・・・」

そう思いながら、基地の外にでて基地を爆破した。

「任務完了」

そっつい、俺は帰ろうとした瞬間、アラートになった。

「後方より敵機が接近中！距離1000！」

俺は、後ろを振り返ると、そこには鈴がいた。

side out

side 鈴

基地に帰って、一夏について調べてたら

「緊急事態発生！緊急事態発生！山陸地帯にて、爆発が発生！
IS部隊は現場に急行せよ！繰り返す！・・・」

出撃命令がくだった。私はすぐにISスーツに着替え、ISを展開した。

「鈴！あなたは先に先行して、相手を足止めして！」

「了解！」

私は一気にブーストを最大にして、爆発のあった場所に、急行した。

「敵をセンサーで発見。モニターに出ます」

「つて、何あれ！？フルスキン全身装甲のIS！？

あんな機体、知らないわよ！！

それでも、足止めしなくちゃ！

side out

side ヒイロ

あれは、中国の第三世代機の甲龍か。

ん？通信だと？

「フルスキンその全身装甲！おとなしく投降しなさい！」

「.....」

「答えなさいよ！！」

「おお、いい具合に怒ってるよ。さて、増援が来る前に倒すか。

「敵ISを破壊する。」

「男の声!？」

俺はデスサイズのステルスを発動して、甲龍の背後に回った。

「何!？どこに消えたの!？センサーにも反応しない?!」

「お前の後ろだよ」

「えっ!」

俺はシザースで、斬りつけた。

「嘘!シールドエネルギーが!？」

「もう、いつちよ!」

「エネルギーが!！」

「残念だったな……………鈴」

「その声……………まさか」

「じゃあな」

「待って!—夏!」

side out

side 鈴

そんな．．．一夏が、フルスキン全身装甲のISを使ってるなんて．．．．．

「鈴！敵は！？」

「ごめん．．．逃げられた」

「敵はどこに！？」

「ごめん．．．私もわからない」

「そう．．．わかった、基地で会いましょう。」

そのあと、私はその場に立ちつくしていた。

（なんで、一夏が、ISを使ってるの？　なんでこの場所にいたの？
わからないよ、なんであんな優しくかった一夏があんなになってるの？
．．．．．決めた、今度会ったときは必ずとっ捕まえてやるだから！

待ってなさいよ！一夏！！）

side out

side ヒイロ

俺は、今、山の中に隠れている。

俺は、任務が終わったためドクター」に連絡をいれた。

「中国でのミッションは成功したようじゃの、ヒイロよ」

「はい」

「では次の任務を言い渡す。次の任務はフランスにある、デュノア社が何やら不穏な動きをしておる

この動きを探ってきてくれ、ヒイロよ」

「任務了解」

俺は、ウイングを展開し、バード形態^{モード}になってフランスにむかった。

中国での、ミッション（後書き）

どうでしたか？

次は前篇 後編に分けてやります

フランスといえば、やはりあの子が出ます。
それでは次回にお会いしましょう。

アンケート結果

アンケート結果です!!

ツールギスを出すようになりました。

アンケートに答えてくれた方々がここは弾に、
という意見が多かったので、弾にツールギスを渡します！

次回予告！

フランスに着いたヒロ。

その近くには、花畑があり、一人の女性がいた。

「君は誰？」

「俺は、ヒロ・ユイ」

「ヒロよ、試作段階のMDを送る。性能結果を図ってくれ」

「ヒロ！僕を連れて行って！」

はたしてヒロは、少女と出会い、何を思うのか？

次回、フランスでの出会い、前篇

アンケート結果（後書き）

アンケートに答えてくれた方々、ありがとうございました！

次回作は来週になるかと思います！

それでは、また！

フランス・THE・Mission（前書き）

二話構成でしたが、一話にまとめました。

では、どうぞー！

フランス・THE・Mission

side ヒイロ

俺は今、フランスに着いた。

俺はドクターからの指示がないため、あたりを散策している。

あたりを散策して、数分 俺は花畑に出てきていた。

そこには、一人の少女がいた。

「あなたは、誰？」

話かけられたからには、答えるか。

「俺は、ヒイロ・ユイ」

「へえー、私はシャルロット、よろしくね」

「ああ」

「ヒイロは、なんでこんなところに？」

「あることをするためだ」

「あることって?」

「それは、言えない」

「そうなんだ」

「ところで、デュノア社がどこにあるか知ってるか?」

「っ!!」

「あんな奴の話をしないで!」

「おい!」

シャルロットは花畑から走って消えた。

side out

side シャルロット

なんでヒイロはあんな奴が経営してる会社のことを聞いてきたの?

けど

またヒロに会いたいなー

あれ？

なんで、僕ヒロのことを思ってるんだろ？

もしかして……………

s i d e o u t

「ヒロよ、任務を言い渡す

デュノア社の思惑がわかった。奴らは無人ISを作ろうとしている。

まだ、計画は始まったばかりだが危険じゃ！

すぐに、デュノア社のIS研究所に行き、破壊してくれ！」

「任務了解」

「そうじゃ、言い忘れていた

今からそっちに試作MDを送る

機能実験をしてくれ」

「了解」

s i d e ヒイロ

俺は、ドクターから送られてくる試験MDを待っている。

「北東より二機のMDが接近、間もなく接触します。」

俺の前に青と赤のMDが降りてきた。

青がヴァイエイト、赤がメリクリウスか

何々、ヴァイエイトはビームキャノンだけで遠距離か

そんなもってメリクリウスはシールドとビームガン、プラネイトデ
イフェンサー？

なんだこれ？

「ヒイロよ」

「ドクター！いきなりなんですか！」

「プラネイトデイフェンサーについて説明しようとおもったの」

「驚かさなideてください」

「すまん、では説明する。」

「ブライイトディフェンサーとは、展開しているとき、ビームや実弾などを無効化する優れたものじゃ」

「なるほど」

「じゃが、威力が高いものと貫通してしまう。気をつけてくれ」

「了解」

「では、任務を開始してくれ」

「了解、これより任務を開始します」

「うむ、では頼むぞ」

俺は今、デユノア社のIS研究所の近くにいる。

まわりにはガードマンが複数、IS操縦者が4人や今研究所出てきた奴を合わせて5人か。

？ あそこにいるのはシャルロットか。だがなぜ？

まあいい、今は任務を完遂する。

「ヴァイエイト、メリクリウス 行け」

二機にそう言うのとブースターを一気に最大まで上げ、研究所に突っ込んでいった。

「敵襲！IS操縦者はISでの応戦を、ほかは機銃での応戦を！繰り返す！」

まず、ヴァイエイトがビームキャノンを発射、ISが一機落ちた。

ヴァイエイトが狙われたため、メリクリウスがプラネイトディフェンサーを展開し、まわりからの攻撃を防いだ

この連携を何度もやり残りはシャルロットのISだけになった。

「くっ！いつまで隠れてるつもりなの！」

やはりセンサーで気付いていたか。

「ヴァイエイト、メリクリウス 止まれ」

俺がそう言つと二機の動きが止まった。

「！？ヒロ！君がこの二機を操っていたの！？」

「そうだ」

「なんでこんなことを！？」

「デュノア社がある計画をしようとしていたからだ」

「ある計画？」

「ISを無人で動かそうとする計画だ」

「なっ！ そんなことは無理だ！」

「そうとわかっていてもやろうとしたんだ」

「じゃあ、ヒロはその計画を破壊するためにここに来たの？」

「そうだ。 お前はどつするんだ？デュノア社は潰れるぞ？」

俺が言つとシャルロットはうつむいた。

「それとも、俺についてくるか？」

「えっ！」

「ついてくるかと聞いたんだが、どつする？」

「……………うん、わかった、ヒロについていくよ」

それに、僕は…愛人の子だからね」

「っ！ ……すまない、シャルロット」

「ううん、大丈夫だよ。あと僕のこととはシャルって呼んで」

「わかった、シャル」

「うん！」

「それじゃあ、行くぞ」

「わかったよ、ヒロ」

こうして、デュノア社の計画と共にデュノア社がIS業界から消えた。

「ドクター、いいですか？」

「どうした、ヒロよ」

フランス・THE・Mission（後書き）

いかがでしたか？

感想を待っています！

次回予告！

ドクター達がいる秘密基地に帰還したヒロとシャル

シャルは基地でいったい何を見るのか？

次回！基地での遭遇

基地での遭遇（前書き）

短いかもしれませんが

どうぞ！

基地での遭遇

s i d e ヒイロ

俺は、シャルと共にドクター達のいる秘密基地に向かっている

「ねえ、ヒイロ。ドクターってどんな人なの？」

「一言であらわすなら・・・マッドサイエンティストかな」

「へ、へえー。そうなんだ。」

「けど、作る作品はすべてすごいよ。」

そろそろ着くから準備して」

「うん」

I N 基地ドッグ

「ヒロよ、久しぶりじゃな」

「ドクターこそ、またなんか作ってるんですか？」

「そうだとも、

そっちにいる子がシャルロット・デュノアかね？」

「は、はい！」

「堅苦しくせんでよい

では、案内してやろう。ついてきなさい」

「はい」

IN ラボ 研究室

「おや、ヒロか、よく帰ってきたな」

「プロフェッサーG、お久しぶりです」

「うむ、よく帰ってきたな」

「ドクトルS、それに老師O、H教授。今戻りました。」

「そっちにいるのが、シャルロットかね？」

「はい！シャルロットです！よろしくお願いします！」

「堅苦しくなくてよい、

ヒロよ、機体を調べるので渡してくれ」

「はい」

「終わったら、声をかける。それまではいいぞ」

「はい、それでは。」

シャルロット、行くぞ」

「あ！待って！ヒロー！」

「若いとは、いいの〜」

「そんなこと言わずに、さっさと仕上げるぞ」

「」「」「」「」「」
「うむ」「」「」「」

今俺は、基地にある俺の部屋にいる。

「シャルロット。お前が此処に来たからには、人殺しの業を背負うことになる。」

それでもいいのか？今なら戻れるぞ」

「うっん、それでも僕は、その業を背負うよ」

「そうか、わかった。だったらお互い頑張ろう、シャル」

「うん、ヒイロ！」

「そうだな、だったら俺の本当の名前を教えるよ」

「え？ヒイロって本当の名前じゃないの？」

「ああ、本当の名前は一夏だ。」

「……………織斑 一夏だ」

「え！織斑ってまさか！」

「あいつの話をするな！！」

「！ ごめん、一夏」

「いいんだ。こっちこそ、すまないな シャル」

「ヒロよ、機体の調整が終わった。ラボまで来てくれ」

「やっとか、行くぞ」

「うん」

IN ラボ 研究室

「来たか、ヒロよ」

「それで、機体の方は？」

「万全じゃ、」

「ただ、シャル専用にはサンドロックを取り外した」

「わかりました」

「シャル、こっちに来なさい」

シャルはドクターのもとに向かった。

s i d e o u t

s i d e シャル

「シャル、こっちに来なさい」

「はい」

私は、ドクター」のもとに行き、新しい力を見た。

「これはサンドロック、砂漠など過酷な場所での、戦闘を有利にするMSじゃ」

「あの、ドクター」

「なんじゃ、シャル？」

「MSっていったい？」

「おお、そうじゃったの、

MSはわかりやすく言えば、人型ロボットじゃな」

「そうなんですか（なんかすごく省略されたような？）」

「サンドロックの武装はバルカン・ホーミングミサイル・ヒートシ
ョーテル・シールド・シールドフラッシュ・クロスクラッシュャーじ
ゃ」

「はい」

「それでは、おぬしにコードネームを授ける。

コードネームはカトリーヌ・ウッド・ウィナーじゃ」

「はい！」

「では、ヒイロを呼んできてくれ」

これでヒイロと一緒に戦える！

s i d e o u t

side ヒイロ

「ヒイロ！ドクターが呼んでる！」

「わかった」

ミッションか、久しぶりだな

「ヒイロよ、彼女のコードネームはカトリーヌ・ウッド・ウィナーじゃ」

「わかりました。これからよろしくな、カトリーヌ」

「うん！」

「それでは、ミッションを言い渡す。

場所は日本、内容は倉持技研にある試作ISの破壊じゃ。

操縦者の名は更識 簪、対暗部用暗部の家の出身じゃ」

「任務了解、試作ISの破壊を開始する」

「任務にはカトリーヌも連れて行ってくれ」

「了解」

「それでは、行ってきてくれ。二人とも」

「了解」

「了解」

日本か．．．

いい思い出はあまりないな。

s i d e カトリーヌ

これから日本で任務だ。

初めてだけど頑張ろう！

「行くぞ、カトリーヌ」

「うん！ヒロ」

s
i
d
e

o
u
t

二人はまだ、この先に起こることを予想もしていなかった。

基地での遭遇（後書き）

どうでしたか？

次は番外編です！

番外編 1 (前書き)

ドクター達と一夏の昔話です！

それでは、どうぞ！

番外編 1

この話はドクター達の昔話である

「J、このMSは封印すべきじゃ！

このMSでは、操縦者次第では、世界が滅ぶぞ！！」

「わかっておる。

「そもそもこんなものを作った儂らがいけなかったんじゃ」

「ではこいつは封印するかの」

「そうじゃな、場所はある島のいいか」

「あの島だと！？正気か！？」

「儂はあの島だからこそ、封印できると考えておる

儂らの始まりの場所であるあの島なら」

「そうじゃな、今思えば、MSはあそこから始まったの」

「では、あの島に封印するかの

ウイングゼロを・・・」

織斑 一夏の昔話

俺は、この世界にISが出てからすべてが変わった。

今まで優しかった女子達が急に態度を変え、俺たち男に、命令をし
てきてきた。

「これ！さっさと片付けなさい！」と

俺たちは最初は反抗した。

だが、女はそれを先生に嘘を言った。

「先生！男子達が私達に暴力をふるってきました！」

先生はその女達のことしか聞かず、俺たちは、体罰を受けた。

その先生も女だったからだ。

「お前たちのせいでストレスが溜まってんのよ！！」

日に日に反抗していくやつは少なくなり最後は、俺と仲が良かった五反田 弾だけになってしまった。

「弾、この先どうする？」

「そうだな、俺たちがあいつらに平伏せたら、終わりだ」

「だけど、俺らの代わりに暴力振るわれてる奴らをこれ以上みていられない！」

「わかってる！わかってるけど・・・どうしようにもできねえんだよ」

「弾・・・」

その日を境に俺たちの反抗は終わった。

女達は調子に乗り、俺たちを見下した。

俺は、第一回モンド・グロッソであの野郎が優勝してきてから、女達の態度が急にか変わった。

「織斑君って、千冬様みたいに才能あるんでしょ？」

そればかりを言われ、才能がないとわかると

「なんも才能のないあなたなんて、千冬様の足手まといなのよ!!」

ああ、そうだよ。だからどうした？

弾に妹がいるが、妹の友達からも言われていたらしい。

「あんたなんて蘭ちゃんより屑よ!」

俺たちと一緒にその一年を過ごした奴らは全員、女性恐怖症になった。

その後は、女と話すこともなく、女とも接しなかった。

弾も妹とは、決別し、家の中で話かけられても無視していた。

その妹がしつこく話かけると弾は、

「俺に話かけるな!!」

そう言い、妹を突き飛ばして、厳さんにお灸をすえられたらしい。

第二回モンド・グロッソであいつが決勝が始まる前に俺は誘拐された。

今の俺にとっては人生の転機だった。

ドクター達にも会え、俺に新しい力　ガンダム　をくれた。

ドクター達には感謝してもしきれないほど恩がある。

その恩を返すためなら俺はどんなこともする。

たとえば、それが

なんであろうとも・・・

番外編 1（後書き）

いかがでしたか？

次は日本です！

楽しみにしてください！

日本編 1（前書き）

弾、登場！

外伝に出てきた機体もです！

それでは、どうぞ！

日本編 1

side ヒイロ

俺は、今カトリーヌと一緒に飛行機に乗って、日本にむかっている。ドクターが飛行機で行け、と言ってきたので二人分のチケットを買った。

パスポート？偽装に決まっている。

「ヒイロ、何か飲み物頼もうか？」

「ああ、緑茶で頼む」

「わかった。すみません、緑茶と紅茶をください」

「はい、少々お待ちください」

そう言くと、キャビンアテンダントは奥に消えていった。

そして、俺は手元にあるPCで倉持技研を調べていた（別名 ハッキング）

．．．なるほど、打鉄式式か、

打鉄をベースにして、そこにミサイルなどの弾頭系を入れた機体か、
ヘビーアームズの方が強いな

「緑茶と紅茶です」

「ありがとうございます。はい、ヒイロ」

「すまないな、カトリーヌ」

「平気だよ、それでどう？倉持技研のISは？」

「しいて言うなら、ヘビーアームズの劣化版だな」

「へー、そうなんだ」

「今回は簡単そうだが、厄介なのが護衛にいる」

「その護衛って？」

「ロシアの国家代表の更識 楯無だ」

「国家代表！？」

「今回は少し、きつくなりそうだな。気をつけないとな」

「うん」

ppppp

「ドクターから暗号通信？どついつことだ？」

「ヒイロよ、日本に儂らの協力者がある

まずはそいつに会ってくれ

名は五反田 巖

儂たちの昔の仲間じゃ

では、頼んだぞ」

「弾の爺さんが！？」

「知ってるの？ヒイロ」

「俺の小学校時代の親友 弾の祖父だ」

「そうなんだ」

ポーン

「間もなく、当機は着陸態勢に入ります。

シートベルトをお締めください」

「そろそろか」

久しぶりだな、日本

IN 成田空港

成田空港か、久しぶりだな

「ここが、日本か」

「そうか、カトリーヌは日本に来るのは初めてか」

「うん！僕、日本に来るのが夢だったんだ！」

「じゃあ、まずは会いに行くか。巖さんに」

side out

side カトリーヌ

「ここが日本か」

秋葉原にも行ってみたいし、原宿にも行ってみたいな

「ここが、日本か」

「そうか、カトリーヌは日本に来るのは始めてか」

「うん！僕、日本に来るのが夢だったんだ！」

「じゃあ、まずは会いに行くか。巖さんに」

巖さんか、どんな人かな？

「ねえ、ヒイロ。」

巖さんってどんな人？」

「あの人は優しくて、女尊男卑にも屈しないすごい人だよ」

「そうなんだ」

会ってみたいな巖さんに

s i d e o u t

s i d e ヒイロ

久しぶりだな、五反田食堂

入るか。

「いらつしゃ．．って一夏か!？」

「お久しぶりです。 厳さん」

「そっちのかわいい子は？お前のこれか」

厳さんはそういうと小指を立てた。

「ち、違います!！」

「ははは！冗談だ、冗談だよ」

「厳さん、俺たちはあなたの力を借りに来ました」

「どういうことだ？」

「ドクター」と言えば、わかりますよね？」

「！　そうか、あいつが」

「伝言を預かっています。」

「久しぶりじゃな、また昔みたいにやらないかの？」

「以上です」

「そうか、また始める気か・・・」

「のった！　ついてきな、二人とも」

「「はい」」

俺たちは、蔵さんに連れられて食堂の地下にいる。

「蔵さん、これは？」

「俺が作った試作機ツールギス」

「こいつはスピードに難があってお蔵入りした機体だ」

「では、いったい誰がツールギスを使うんですか？」

「ああそいつは「そこから、先は俺に言わせてくれ、祖父^{じい}ちゃん」

「その声、弾か！久しぶりだな！」

「ああ！懐かしいな、一夏！で、そっちの女は？」

弾は声のトーンをさげた

そうだった。弾は極度の女嫌いだった。

「そんな声だすな。この子はカトリーヌ・ウッド・ウィナーだ」

「よ、よろしく」

「ふん、まあいい。」

で、お前が日本に来るってことはやっぱり」

「そうだ、お前の力を借りに来た」

「OK OK いいぜ。俺とトールギスでやってやるよ」

「やっぱり、お前が操縦者か」

「まあな」

「よし！話も終わったみたいだし、ついてきな！」

蔵さんに言われて、俺たちはブリーフィングルームに移動した。

IN ブリーフィングルーム

「で、目標の場所は？」

「場所は倉持技研

そこにある、試作ISの破壊だ」

「なんだ、あいつらの所か」

「蔵さん、どういうことですか？」

「俺は、あそこで働いていてな、そんな時にツールギスを作ったんだよ
だから、俺の名前を言えば、簡単に入れるぞ」

「これで進入路は確保できた」

「そうだ、一個言い忘れていた」

「なんですか？」

「あそこに、もう一機MSがいる

俺がトルギスを作った後にできた機体だ。

名前はガンダムアクエリアスだ。

研究者たちが厳重管理している」

「わかりました。

こちらで対応します」

「よし、これから、作戦を伝える。

内容は試作ISの破壊、それだけだ」

「了解」

「研究所には、俺が伝える。

すこし、待ってろ」

かくして倉持技研攻略が始まろうとしていた。

日本編 1（後書き）

いかがでしたか？

次回！倉持技研攻略！

倉持技研と言えば！あのキャラが出来ます！

お楽しみに！

倉持技研攻略！（前書き）

TPPの正式表明前に投稿しました！

では、どうぞ！

倉持技研攻略！

side ヒイロ

蔵さんは、倉持技研に連絡を入れて今、交渉している。

「俺だ。そっちに俺の孫とその友達を連れて行きたいんだが

．．．何！？ 専用機作ってるから無理だと！？

こっちは例のあれを起動させるために行きたいんだよ！

．．．．．ちっ！てめえじゃ話にならねえ室長呼んで来い
！！」

．．．．．なんか、雰囲気が変わっているような．．．

ま、まあ いいか！（現実逃避）

「ヒイロ、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

カトリーヌにも、心配されたよ．．．

「よし！お前ら！準備できたか？ちよつと長引いたが行くぞー！」

「「「はい」「」」」

「表で待つてな、今車出してくるから」

そついうと蔵さんは、車庫に向かつていった。

「なあ、一夏。なんでお前あいつにヒロって言われてるんだ？」

「その名は捨てた。今はヒロ・ユイだ」

「やっぱり、あの事件か」

「ああ、俺はもう、あいつとは決別した」

弾の言う、あの事件は俺が誘拐された事件だ。

あれは、世間では「モンド・グロッソ事件」

なぜその名になったかというと、第二回のモンド・グロッソ決勝戦前に俺が誘拐されたからである。

その時に、あいつが決勝戦を放り出したからだ。

世間はウザつたいな

ツブシタクナル

っ！一瞬あいつ（・・・）が出てきそうになっちまった。

あれは、俺が初めて人を殺した時に生まれた二重人格だ。

その後、俺はあいつに乗っ取られ破壊の限りを尽くして、あいつは眠った。

その後、ドクターに処方箋をもらい、あいつを今まで封じてきた。

あいつが出てきたらここにいる奴全員殺してしまっている。

「おい、一夏 早くしろ」

「ああ、今いく」

さて、行くか。

「俺だ。入れてくれ」

「わかりました。ようこそ、倉持技研へ」

「厳さん、いきなり来るのはよしてください」

「悪いな、仁」

「みんなに紹介する。こいつは仁、牧野 仁だ。挨拶しとけ」

「「今日はお願いします」「」」

「ええ、よろしくね」

「さっそくだが仁、あれの場所に連れて行ってくれ」

「わかりました」

俺たちは、厳さんと仁さんについていった。

s i d e
o u t

side 弾

「ここが、昔祖父ちゃんが通っていた所か・・・」

「あそこが今開発中のIS研究室だよ」

ふん、あんな奴ができたせいで・・・

あの子、何してるんだ？

「おい、弾！どこに行くんだよ！」

「すぐ、追いつく！待ってる！」

「なあ、お前。そんなところで何やってるんだ？」

「・・・あなたは？」

「俺の名は五反田 弾！お前は？」

「私は更識 簪」

「簪って呼ぶけどいいな？」

「・・・うん」

「お前は、なんでここに？」

「私、ここの専属操縦者だから・・・」

ISのか・・・ちっ！うざいな

「なんで、お前はISに乗るんだ？」

「え？」

「だから、お前はなんでISに乗るんだって聞いてるんだよ！」

「ひっ！」

やべー、また（・・・）やっちゃったよ

「あー、すまん。悪気はなかったんだ」

「・・・うん」

「もう一回聞くけど、なんでISに乗ってるんだ？」

「・・・私にお姉ちゃんがいるんだけど、

そのお姉ちゃんに私は、いつも負けてるの。

だから、私はお姉ちゃんに認めてもらうために「そんなんかよ！」
？」

「そんだけかよ、そいつに認めてもらうためにもほかにもやればい
いだろ」

「・・・あなたにはわかるの！？」

姉にも負けて！まわりからも「期待外れ」と言われる気持ちわかるの！？」

「わかるさ」

「！？」

「俺にもあつたさ」

そうだな、あつたな。

あいつに、劣ってたな、俺

「俺には、妹がいるんだが

妹には、学力や人望、いろいろ負けてた。

妹の友達からも言われたよ「恥さらしの兄貴だよな！」って

そんな時は、死のうかぐらい考えてたよ」

「そんな・・・」

「何かで見返せるように頑張るな。

じゃあな」

俺は、その場から離れようとした

side out

side 簪

五反田 弾．．．なんて人なの

私と同じ境遇だったのに、それに打ち勝つだなんて．．．

「じゃあな」

「あつ、待って!」

「なんだ、簪?」

「私も．．．私も連れていつて!」

「なんだと?」

「私は、ずっと逃げてた。

けど、あなたの言葉を聞いて振り切れた」

私が決めるんだ。誰からでもない．．．私が!

「だから、あなたについていかせて!」

「俺、いや、俺たちが通る道は過酷だ。

それでもいいのか？」

そういわれてけど私は、

「いいよ！そのためにはなら、なんでもする！」

．．．．．どうかな？

「．．．．．いいぜ、わかった

俺についてきな」

「うん！」

此処からどんなことがあるかと私は．．

進む！私が決めた道をまっすぐ進む！

s i d e o u t

s i d e ヒイロ

遅いな、弾の奴。

「おーい！一夏！」

「やっと来たか」

どんだけまたせ．．誰だ、あれ？

「すまない、みんな

こいつは更識 簪

俺たちと共に行動する新しい仲間だ」

「さ、更識 簪です！よろしくお願いします！」

へー、あの女嫌いの弾が認めるなんてな。

「俺の名はヒイロ・ユイ。よろしく頼む」

「私は、カトリーヌ・ウーバ・ウィナー。よろしくね、簪」

「こいつの祖父 五反田 厳だ よろしくな！」

「いいんですか？簪さん」

「？」

「こちら側に来るということは、家族と縁を切るということですよ」

「．．．．．大丈夫です！」

「わかった、来なさい。それに皆さんも」

俺たちは仁さんに連れられて嚴重管理室に向かった。

IN 嚴重管理室

あれが、アクエリアス．．．

なんて言うか、派手だな。

「厳さん、あれが．．．」

「そうだ、あれが俺たちが作ったMS

アクエリアスだ！」

「あの．．．」

「なんだ、簪ちゃん？」

「MSっていつたい？」

「MSって言うのは

ISより装甲が固くスピードもあり、何より攻撃力が高い。

ふつ々にMS一機で十機のISを倒せることもない代物だ」

「そんなものがあるなんて！」

「そうだ、言い忘れてたな。

この三人もMSを持ってるぞ」

「えっ！」

「持ってるぞ」

「そうだね」

「そうだな」

やっぱり、そんな物騒なものがあると驚くか

「そうだ！」

お前さんに、アクエリアスを渡す！」

「そ、そんな！いきなり！」

「あ、ありがとうございます！」

「よし！さっそく性能実験するぞ！」

みんな！シェルターに避難しろ！

弾！ヒロ！カトリヌ！そして簪！MSを展開しろ！」

「「「了解！」「」「」

今回はヘビーアームズで行くか。

「来い！ヘビーアームズ！」

「来て！サンドロック！」

「行くぞ！トールギス！」

「行くよ！アクエリアス！」

全員がMSを呼び出した。

「じゃあ、あとは任したぞ！」

敵さんたちはシェルターに向かっていった。

「俺がドーバーガンで道を開く！行くぞ！」

弾がドーバーガン（ビーム使用）を上に向けた。

「行くぞ！」

弾がそういうと上に向かって撃った

そして、俺たちの倉持技研攻略が始まった

倉持技研攻略！（後書き）

どうでしたか？

自分はTPPが怖くてたまりません

ですが、それにめげずに投稿しました

野田総理、頼みます！

倉持技研攻略、成功！（前書き）

指摘があつたので直しました

倉持技研攻略、成功！

side ???

私は、ここ倉持技研で臨時警備をやってるわ。

それにしても、さつきから、簪ちゃんの姿がみえないのよね

「どこに行ったのかしら？」

それに、さつき会った研究員の人たちが慌てて走って行ってたし・

いったい何が始まるうとしているの？

ドオオオオオオン！！！！

何が起こきたの！？

「第一嚴重管理室にて爆発、非戦闘員はシェルターに、戦闘員はただちに武器を持ち、現場に急行してください。繰り返します……」

くっ！こんな大規模な爆発やばいわね……

「霧纏の淑女起動！」
ミステリアル・レイディ

私は霧纏の淑女を起動させて爆発が起きた場所に向かった。

s i d e o u t

s i d e ヒイロ

弾が上に向かって、ビームキャノンを一発撃って地上に出てきた。

やはり、警備のIS操縦者が集まってるな。

へそこにいる4人！何があった・・・！？

気付かれたか、

へそのこの4機に警告する！技研内での建物損壊で拘束する！

フルスキン
全身装甲を解除し、地面に手をつけ！

警告は一度だけだ！

「どつするっ」

「どつするって・・・倒すだけだろ」

まあ、そうだな

「よし、いくぞ！」

「「「おう／はい！」」」

全員で一斉に攻撃を仕掛けた。

s i d e o u t

s i d e 簪

私専用のMS アクエリアスの武装は

ドーバーガン実弾、ビームとヒートロッドと105mmライフル

あと、アンチISウイルス

これは、自分から半径800mmにいるISのシステムすべてを停止させるウイルス

私は最初に向かってきた打鉄に向かって実弾のドーバーガンを撃った

「!? キャー！」

．．．当たっただけで威力が高すぎて一撃でISが解除された

．．．．．MSってすごい

ISよりも強い．．．

それにスピードも武器の威力も違う

けど．．．．強い武器を持てばその分誰かを殺めてしまうかもしれない．．．

．．．．．だけど、私はその業をちゃんと背負っていく！

ふそこの未確認IS！ ISを解除しなさい！」

この声は．．．．お姉ちゃん！？」

ふそこのIS！解除しなさい！」

私は顔の部分だけ、解除した

「！？ 簪ちゃん！？なんでそれに乗ってるの！？」

「．．．．．私は私の道を進むの．．．

更識家に決められた道でもなく、私の道を進むの！」

私がずっと思っていたことを言った。

「簪ちゃん！今からでも遅くないわ！

そのISを解除して！」

けど、私は・・・

「・・・いや」

「え？」

「いやって言ってるの！」

「っ！！」

私が初めて怒り、お姉ちゃんは驚きを隠せなかった。

「大体なんでお姉ちゃんは私のことを気にしなかったの！？」

私がお姉、あなたの足手まといだとも言いたいの！？」

私がお姉ちゃんのことをあなたといったら、あの人は顔を真っ青にした。

「そ、それは・・・」

「言いよどんでるってことは、そう思ってるんだ。

・・・私は今をもって、更識家から縁を切ります！」

「！！！！そんな！」

考え直して、簪ちゃん！」

もう、決めたんだ 私は

「もう遅いよ

あたしはもう決めたから

それに．．．私は、私を認めてくれた人に着いていくの」

そう．．．弾が．．．．．認めてくれたから

「そんな．．．．．」

もう、話すことなんてないから決めよう

「アクエリアス！」

アンチISウィルス、起動」

ハOK

アンチISウィルス起動

．．．対象捕捉

敵機に対し、ウィルス起動」

「！？ どうしたの、霧纏の淑女！」
ミステリアル・レイディ

「システムに異　　ザザザ　　常アリ

ISザザザザ　　緊きザザザ　　解除」

「そんな！」

あいつは地面に落ちていった。

「もう、あなたとは話す義理もなくなっただわ」

pppp!pppp!

「はい、こちら簪」

「こちら、ヒイロ

この技研の勢力はすべて排除した。

この場所まで来てくれ」

「わかった」

アクエリアスのスラスターを一気に吹かした

side out

side 楯無

簪ちゃんから、あんなこと言われたの初めてね・・・

簪ちゃんが更識にあんなに憎んでたなんて・・・

あんなに拒絶されちゃったし・・・

本音や虚にも顔が出せないわね・・・

けど、簪ちゃんを認めたって子・・・

・・・もしかしたら、簪ちゃんを癒してくれるかもしれないわね

頼んだわよ

side out

side ヒイロ

全員が五反田食堂の地下に戻ってきた。

「おう！お前ら、よくやったな！」

「!? 蔵さん、いつの間に!?!」

「あそこのシェルターはここに繋がっててな」

たしか、技研からここの距離は・・・

5?!?!?

どんだけだよ

「まあ、アクエリアスの起動も成功したし、祝賀会だー!」

「「「「おー!?!?!」」」」

俺たちは食堂でたらふく飯を食べた。

・・・災難もあつたが

pppp! pppp!

「ヒイロ、聞こえておるか?」

「はい、ドクター

なんでしょうか?」

「次の任務じゃ

場所はイギリス

IS研究所を襲撃してくれ」

「任務了解」

「では、頼んだぞ」

さて、また忙しくなるか！

倉持技研攻略、成功！（後書き）

いかがでしたか？

感想お待ちします！

オルコット夫妻との話し合い（前書き）

イギリス編は話し合い、自宅での話し合い、そして襲撃の3つに分けられます

それでは、どうぞ！

追伸 オルコット夫妻の死亡フラグは無くしました。

オルコット夫妻との話し合い

side ヒイロ

俺は、今カトリヌとイギリスに向かっている。

弾と簪は敵さんのラボで検査している。

pppp! pppp!

ヒイロよ、ある情報を手に入れた

転送するぞ

「了解」

内容は亡国企業によるISの強奪か・・・

強奪するISはサイレント。ゼフィロス

BT兵器搭載試作機の二号機か

「ヒイロ、亡国企業って？」

「第二次世界大戦時に生まれた、テロ組織だ」

そして、俺を誘拐した組織でもある。

「今回襲撃するところのISを強奪するんだ

その組織」

「そうだな」

p p p p! p p p p!

「ヒイロ、イギリスに着いたらこの場所に行ってくれ

私の教え子たちがいるはずだ」

「了解」

「それではな」

p!

「ここは、たしか・・・」

「此処ってイギリスのオルコット財閥の本社じゃないか!」

「そうなのか、カトリーヌ」

「うん、僕は一回社長と会ったことがあるんだ」

なるほど、社長と会うときは大丈夫そうだな

「けど・・・」

「どうした？」

「娘さんのセシリアって子が男の人をすごい嫌悪してるんだよ」

「今の世の中に影響された奴だな」

そういう奴は・・・最悪だな

「もうすぐ、イギリスだよ」

そろそろMS解除しないと」

「わかっている」

俺たちは森林の中に降りて行つた。

「すみません、警備員さん

社長に旧友の娘、シャルロットが会いに来ました。

と、伝えてくれませんか？」

「少し、待っていてください」

「はい」

「すごいな、カトリーヌ」

「ふふ、それほどでも／＼」

カトリーヌが少し顔を赤らめた。

「シャルロットさんですね

社長が最上階でお待ちしております」

「わかりました、

行く、ヒイロ」

「ああ」

エレベーター移動中

IN 最上階

「いらっしゃい、シャルロットちゃん

そっちの子は恋人？」

「ち、違いますよ／＼！！！」

「ふふ、

それで、今回はどんな用事なの？

それにデュノア社の潰れた原因についてもね」

「僕たちはこの世の中をただすための計画の一部としてここに来ました」

「ということとは、そっちの子も？」

「はい、ヒロ挨拶しよ」

「ヒロ・ユイだ、よろしく頼む」

「こちらこそ、私の名はシリル・オルコットよ

よろしくねヒロ君」

「シリルさん、すいませんが本題に入らせてもらいます。

ヒロ、頼むよ」

「ああ

あなたはドクター」を知っているな？」

「！！ ええ、私たちの大学時代の先生だったからね」

「俺たちはドクター」の元で開発されたMSでこの世界をただす組織だ」

「そのMSってまさか・・・」

「わかってるのなら、話が早い

俺たちはMSを使って世界各地のISに関係する場所を襲撃してきた。

今回はここ、イギリスのIS研究所が標的になった」

「そういうことね・・・

ドクターのことだから何か起きると思ってたけど

まさか、こんなことになるとはね」

「あなたには協力者になってもらいたい」

「そういうことね．．．いいわよ」

ただし、私たちにも情報をまわしてよね」

「わかった、すこす」シリル」

「あら、メールどうしたの？」

「ああ、今日、ん？ そちらの子供たちは？」

「彼はヒロ・ユイ君 彼女はシャルロ」シリルさん」

どうしたの？シャルロットちゃん？」

「私の名前はカトリーヌ・ウッド・ウィナーです」

「デュノアとは縁を切ったのね？」

「はい」

「君たちがヒロ君とカトリーヌちゃんだね？」

私の名はメール・オルコット

セシルの夫だよ。

時々、こんなにきれいな人をもらったのが、不思議に思っけどね」

「あら、私はあなたのことをこんなに愛してるのに／＼／＼ムニユ

「や、やめてくれ！セシル！人前なんだよ／＼／」

「ふふ、いいじゃない／＼減るもんじゃないんだし／＼／」

「んっ！！」

「「あっ
「」

シャルロットが咳払いをして、話をすすめる。

「今回はサイレント・ゼフィロスの破壊だ。

あと亡国企業がISを強奪するという情報がいってきた」

「亡国企業ね、厄介な組織よね」

「知ってるんですか？」

「会社の方でも調べてたのよ」

「2日後に攻撃を仕掛ける」

「わかったわ

宿はどうするの？。」

「まだ、決まっていない」

「じゃあ、私たちの家に来なさい。

いいわよね？メール」

「うん、いいんじゃないかな」

「それじゃ、行くわよー！」

「「はい」」

俺たちはオルコット家の自宅に向かった

オルコット夫妻との話し合い（後書き）

いかがでしたか？

感想お待ちしております！

セシリアとの会合　そして・・・（前書き）

すいません！更新が遅れてしまいました！

理由は期末テストと塾が忙しくて更新できませんでした。

それでは、どうぞ！

セシリアとの会合　そして・・・

side　ヒロ

俺たちは今、オルコット家の屋敷で食事をご馳走になっていた。

「ヒロ君、ちょっといいかな？」

「ああ、大丈夫だ

それでなんのようだ？」

「実は私達には娘がいるんだけど、ちょっと性格に難があってね
すこしでいいからあの子の話し相手になってくれないかしら？」

「任務了解、その子の名前は？」

「セシリアよ、侍女のチェルシーと一緒にいるはずよ

場所は書庫で勉強中のはずよ」

「わかった、カトリーヌに席を外すと言ってくれ」

「ありがとっ、それじゃあ、頑張ってね」パチッ
ミ

シリルは俺にウィンクをして食卓に戻っていった。

IN 書庫

この屋敷は広いな……

ここか

俺は書庫室のドアを開けた。

「？どなたですか、チエルシーですか？」

「すまない、君と話しがたくて来たんだ。

セシリア・オルコットでいいな？」

「ええ、そうですが、あなたはお母様の客人ですね。

名前を教えてくださいませんか？」

「俺の名はヒロ・ユイだ。

よろしく頼む」

「あなたはお父様と同じ人間なんですか？

そうでしたら、帰ってください。

勉強の邪魔です」

なるほど、こいつは女尊男卑に影響された子か……

「お前の父親はお前の思うほど貧弱ではないぞ」

「っ！

あなたになにがわかるんですか！？

いつもお母様に頭を下げるだけの男なんですよ！？

それを貧弱と言わず、なんと言えればいいんですか！？」

こいつの言いたいことはわかる。

だが、

「仮にもお前の父親なんだぞ！

お前は母親と父親のおかげで今まで生きてこれたんだぞ！？」

「それでも、貧弱は貧弱ですわ！」

「ふざけんなよ!!」

「っ!!」

今の言葉でセシリアが怯んだ。

「お前は父親と母親の愛情を受けながら育ってきたんだぞ!？」

その父親を貧弱呼ばわりだと!？

ふざけんな!」

「で、でも私は、私は・・・」

そういうとセシリアは泣き始めた。

「お前は父親と母親の愛情を受けながら育ったんだ。

それを無駄にすんな」

「はい／＼／」

オルコットは泣き止んですこし顔を赤らめながらも俺に言ってきた。

「私、お父様と話してきます!」

そういうとセシリアは駆け出していった。

s i d e o u t

s i d e セシリア

私はあの方、いえ、ヒロさんに言われて今、お父様のいる食卓に向かっていた。

「お父様！」

お話しがあるのですが、いいですか？」

「いいよ、セシリア。

それでなんの用だい？」

「私は今までお父様を冷たく接していました。

ですが、私はヒロさんに言われました。

「親の愛情を無駄にするな」と・・・

お父様！今まで、申し訳ございませんでした！」

「いいんだよ、セシリア。」

私は君に父親らしいことを何一つ出来なかった。

本当にすまなかったね、セシリア」

そんな……ですが、お父様は！

「いえ、私をお母様と一緒にに生んでくれたんですもの。」

お父様らしいことは十分にしてくれましたわ」

っ、急に目が熱くなってきましたわ。

「……ありがとう、セシリア」

お父様がそう言っていると私を抱き締めました。

ヒロさん、私のためにありがとうございますわ。

s i d e o u t

S i d e ヒイロ

「……………どうやら俺の任務は終わったようだ。」

「任務完了」

そう言うその後ろからカトリーヌが来た。

「ヒイロ、そろそろ作戦会議したいから、集まってくれないかな？」

「わかった、今行く」

I N ブリーフィングルーム

『ヒイロ、カトリーヌ

亡国企業の襲撃時間がわかった。

時間は早朝の08時じゃ。

この時間は夜間警備隊と朝の警備隊が入れ替わる時間帯だからそこを狙ったものだと思われる。』

「僕たちはその迎撃ですか？」

「今回はイギリス政府との合同演習という名目での迎撃じゃ。」

イギリス政府にMSリーオーとエアリーズの設計図を見せたら

『ISより高性能だ！是非とも、我がイギリスで研究させてくれな
いか！？』

と言ってきたので、交換条件を出したわ』

「どんな条件なんですか？」

大方、ドクターのことだ。

ISコアの廃棄か破壊だろう。

『ISコアの破壊じゃ。』

あの設計図を見れば、すぐに答えを出すしかあるまい』

「ですが、今ISの研究をやめたら、危険なんじゃ？」

そこは俺も気になる。

『そこは、大丈夫じゃ

儂たちが表に出るときにという約束じゃ』

「わかりました。

それで、敵の数は？」

『三人じゃ。

ヒロよ、お前の因縁に近い奴もある。

あと、三人は捕縛してくれ』

「？ なぜです？」

『少し聞きたいことがあるのでな。

それでは、頼んだぞ』

「「了解／了解しました」「」

こうして、亡国企業との戦いが始まるのであった。

セシリアとの会合　そして・・・（後書き）

いかがでしたか！？

感想待っています！

亡国企業の三人と対面（前書き）

今回はいつにもまして多くなっております。

それでは、どうぞ！

亡国企業の三人と対面

side ???

「これから、イギリスのB T兵器搭載型試作機の二号機サイレント・ゼフィロスの捕獲を開始するわ。」

「少ばかり抵抗があるかもしれないけど、Mが目標を奪取したら、すぐ逃げるわよ」

「いいぜ、けどMがへましなければな」

「オータム!」

「ヘイヘイ、わかってるよスコール」

「あなたもいいわね、M?」

「ああ」

side out

side ヒイロ

「間もなく、敵が攻めてきます

まずは私たちが敵を抑えます。

その間にリーオーとエアリーズの初期生産型を装備し、敵を捕縛してください。

それが今回のミッションです」

「質問いいか？」

守備隊の一人が聞いてきた。

「どうぞ」

「リーオーとエアリーズの武装を教えてください」

「わかりました。

リーオーの武装は105mmマシンガン、バズーカ、ドーバーガン
ビームサーベルが二本とシールド、それにビームライフルです。

エアリーズはチェーンライフルとミサイルポッドです。

ほかに質問は？」

「……………ないようですね。」

「それでは、ミッションを開始してください」

「カトリーヌ」

俺はカトリーヌと第一防衛ラインの防衛になっている。

「うん、わかってるよ。ヒロ」

「いくぞ」

俺たちは敵が来るであろう防衛ラインまで飛んだ。

IN 第一防衛ライン

「そろそろ時間だ。カトリーヌ」

「うん、

起きて、サンドロック！」

「いくぞ、ウイング」

カトリーヌと俺はガンダムを起動した。

「いくぞ、カトリーヌ」

「うん」

ダダダダダっ！！

500m先から銃弾が飛んできた。

だが、ガンダムには通用しなかった。

「先制攻撃を仕掛ける」

おれはバスターライフルで二機のISを狙った。

だが距離があるためかかすっただけだった。

「俺はラファールをやる。」

カトリーヌはもう片方を」

「わかったよ」

side out

side スコール

「いい、オータム？」

「いつでもいいぜ！スコール！」

「私たちは敵のひきつけ役だから、派手に行きましょう」

「いいぜ！このオータム様のアラクネの八丁マシンガンをくらいな
！！」

ダダダダダッ！！

オータムが撃ったマシンガンは直撃したけど……

「うそでしょ！まったくの無傷だなんて！」

片方のISがライフルを呼び出して撃ってきた。

ゴウッ！

撃たれた山吹色のビームが私たちの間を通った。

「おい、嘘だろ！？掠っただけでシールドエネルギーが半分持って
かれただと！？」

オータムがそう叫んだ。

「オータム！気をつけて！」

敵は二機だけと新型のようだわ！

私は今ビームを撃ってきた方をやるから、あなたはもう片方の方を
！」

「わかった！」

私たちは、二機のISにむかって攻撃を仕掛けた。

s i d e o u t

s i d e ヒイロ

ラファールが近づいてきた。

「ヘー、フルスキン全身装甲のISなんてすごいわね。
もらっていいかしら？」

「俺に勝つたらな。」

それにこれはISではない」

「じゃあ、なんていうの」

「俺に勝てたら教えてやる」

俺はバスターライフルを構えて撃った。

が、避けられた。

腕のいいIS操縦者とみた。

「そのライフル、すごい威力ね」

「当然だ」

俺は、肩にあるマシンキャノンを撃ったが相手はそれを簡単によけ近距離戦闘を持ち込んできた。

俺は腰にマウントしてあるビームサーベルを取り出し、相手の剣を切り落とした。

「そんな、ビームの剣だともいうの!？」

「終わりだ」

俺はビームサーベルで相手を切り付け、シールドエネルギーを0にした。

「ISを解除して、待機状態のISをこちらに投げてもらおうか」

「わかったわ」

相手はところどころ壊れたラファールを解除しこちらにネックレスを投げてきた。

「質問に答えてもらおう。」

お前の名は？」

「私の名はスコールよ。」

名前を言ったんだから、あなたの名前を教えてよ」

「それは無理だ。」

次の質問だ」

「せつかちね」

「仲間は全員で何人いる？」

「・・・・・・・・二人よ」

「そうか」

俺はカトリーヌに連絡を取った。

「カトリーヌ、そっちはどうだ？」

『うん、すぐに終わったよ』

すくくうるさいけどね』

（この縄をほどけ、クソガキ！離せー！）

「そいつをこっちに連れてきてくれ」

『うん、わかったよ』

俺はカトリーヌと連絡を切った。

「そんな、オータムもだなんて」

「当然だ、俺たちはガンダムのパイロットだからな」

！！しまった！

つい、ガンダムのことを喋ってしまった。

「へー、それガンダムっていうんだ」

「・・・ああ、そうだ」

何やら基地の方から銃撃の音が聞こえてきた。

クスッ

「？　なにがおかしい？」

「何って、私たちの仲間が此処にある試作段階のISを奪っているはずよ」

「それはどうかな」

「どういこと？」

『ス．．．スコ．．．スコール！』

「どうしたの。M？」

『作戦は失敗だ！』

フルスキン
全身装甲のISが何体もいて身動きが取れん！

どうする！』

「やはり、まだ仲間がいたか」

「くっ．．．」

「降伏しろ、今なら仲間も助かる」

「．．．．．わかったわ

M
」

『どうした！』

「降伏しなさい」

『な、何を言っている！』

「今の私たちだと無理だわ。

あきらめるしかないわ」

『くっ、わかった』

「俺だ、攻撃を停止しろ」

『了解！』

基地から銃撃音が止まった。

「ヒロ！連れてきたよ」

「縄ほどきやがれ！クソガキ！」

「うるさいよ」グイッ

「グエっ！」

カトリーヌが縄で縛っている奴を思いっきり引っ張った。

「ヒロ、この後どうする？」

「基地に行くぞ」

「了解」

俺とカトリーヌは二人を連れて基地に向かった。

I N 基地

「ヒロさん！基地にいた不審者捕縛しました」

「わかった、連れてきてくれ」

「はっ！」

基地の兵がMっていう奴を連れてきた。

「っ！」

なぜ、なんでこいつが

あいつの顔をしてるんだ！？

「お前は・・・織斑 一夏！」

そういうとMは俺に殴りかかろうとしたが電磁ネットで捕縛されているので殴りかかれなかった。

「ヒロ、織斑って、まさか、あの織斑 千冬の弟、織斑 一夏！？」

「．．．．あ、俺の本当の名は織斑　一夏だ」

ザワザワザワ

基地の兵たちが騒ぎ始めた。

「静かにしてくれ！」

騒いでた兵士たちが静かになった。

「俺はもう、その名を捨てた。」

あいつとはもう縁を切った」

「ヒロ、そんな過去が．．．」

「みんなは知っているだろ

第二回モンド・グロッソで起きた誘拐事件のことを。

俺はその時、ドクターに助けられたんだ」

「だから、誘拐事件で誘拐された一夏、うつん、ヒロが見当たらなかったんだ」

「ああ、だがその名を持つ人間は死んだ。

今の名はヒロ・ユイだ」

「へー、そうなんだ」

スコールが喋った。

「私たちが君を誘拐したんだよ」

「そんなことは知っている」

「なんですって？」

俺はすでにドクターからその情報を聞いていた。

pppp! pppp!

『ヒイロ、亡国企業の奴らは捕まえたかの？』

「はい、ドクター」

何か、聞くことはありませんか？」

『ふむ、君たちはカーンズを知っておるか？』

「.....知ってるわ

私たち、亡国企業の武器開発部主任ですもの」

『やはり、そうか

ヒイロ、こやつらにあの薬を飲ませなさい』

「了解」

俺はイギリスに来る前、ドクターから渡された薬を飲ませた。

無理やり

「ゲホゲホッ！　いったい何の薬なの！？」

スコールが言った。

薬の中身には俺も聞かされていない。

『その薬は君たちの体内にある監視用ナノマシンの破壊するためのナノマシンじゃよ』

「そんな！　私たちの体内にナノマシンがあつたの！？」

『おや、きずなかったのか。』

たぶん、亡国企業で出される食事に入っておつたんじゃろう。

しかも、一定時間内に摂取しなくてはならないタイプじゃの』

「けど、私たちはずっと監視されてたの？」

『うむ、もしかしたらこの会話も知られたかもしれん』

「そうなの・・・」

けど、そのナノマシンを壊された私たちはどうなるの？」

『その件についてだが、君たちをガンダムのパイロットにしようかと考えておる』

「正気ですか、ドクター！」

この人達は元とはいえ、亡国企業に身を寄せてたんですよ！」

カトリーヌが大声を張っていった。

「別に俺はいいぜ、スコールについていく」

「オータム、……………わかったわ

ドクター、私たちをそのガンダムのパイロットにしてくれませんか？」

『うむ、いいぞ。』

だが、彼女はどうする？』

今まで黙っていたMにドクターが聞いた。

「……………私は織斑 千冬の遺伝子から生まれた。

だが、私は私であるために織斑 一夏を殺すために組織にいた。

私はもう、その目的さえ、失った。

本人はもう、自分は死んだといっている。

私はなにをすればいいんだ」

Mが悲しげに言った。

「お前はあいつの遺伝子から生まれた。

元とはいえ俺は織斑　一夏という名を持っていた。

．．．．．お前、俺の義妹にならないか？」

「何？」

「お前、今、何歳だよ？」

「．．．．．14だ」

「だったら、大丈夫だな

俺の義妹になって次の目標を探そうぜ」

「．．．．．ああ」

Mは少し間を開けたあと俺の義妹になることを決めてくれた。

『決まったようじゃな。

では、スコール、君にはヘビーアームズを。

オータム、君はシェンロンを。

M 君には「マドカだ、マドカと呼んでくれ」

ふむ、わかった。マドカ、君にはデスサイズを。

ヒイロ、みんなを連れて一旦、基地に戻ってきてくれ』

「任務了解。

行くぞ」

「わかったよ、ヒイロ」

「年下に指図されるのは癪に障るけど、しょうがねえな」

「年下の先輩か、フフッ いいかもね」

「わかった……兄さん」

上からカトリーヌ、オータム、スコール、マドカだ。

俺は、三人にガンダムが待機状態になっているアクセサリーを渡した。

「へー、これがガンダムね」

「結構いいじゃねえか!」

「いい感じた」

三人はガンダムを展開した。

「俺についてきてくれ」

俺は先に空に飛んだ。

カトリーヌも飛んだ。

三人はふらつきながらも飛んだ。

俺たちはドクター達のいる秘密基地に向かった。

亡国企業の三人と対面（後書き）

いかがでしたか？

マドカはヒロの義妹になるので名はマドカ・ユイになります。

感想お待ちします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6311x/>

I S インフィニット・ストラトス Wが羽ばたく時

2011年12月28日23時47分発行